

論評：高木英至「協働過程の研究 ——社会学基礎理論の観点から」(1977)

橋爪大三郎

この論文は、全体で662枚と、文冊であり。しかも、隅々まで充分緻密に構成されている、きわめて完成度の高いものである。この分野での重要な貢献をなすものと言えらるるは、明らかである。

わたしが、この論評のほかに、問題にしたのは、この論文の細かな論点では、ない。むしろ、この論文全体が示している方法論的な問題点に議論を絞って、論評したいと思う。それは、具体的にどういふ点を論ずるのか？ それは、大きく2点にわけられよう。まず、第1点としては、論者(=高木氏)のいう、「報酬-コスト定式化」をめぐり問題。そして、第2点としては、この論文全体が示している社会学理論の構成法、あるいは、ひとことと言えば、経験的命題から理論的な命題体系へと、どのように拡大的に社会学理論を構成していくか、という、論者の見通しについて。特にこの2点が明確にほらないと、この高木論文のねらいは、おそらく、果たされないだろう、という感じがする。

実は、この2点は、「前置き」のなかで論者自身が言及している、この論文の2つの特徴にも、対応している。すでに彼がのべているところによれば：

「……本論文は以下の2つをその主要な特徴とする。第1に、社会学基礎理論を、近時衰退した形式社会学の体裁をまとめる、即ち、社会関係から出発させる点、第2に、その法則性の理論的根拠(rationale)を、社会関係を前提にした報酬-コスト定式化(reward-cost postulate)に求める点、である。」(高木[1977: i])

というのであるが、この論文を特徴づけると、むしろ、また論者自身も、認めている、2つの前提は、じつは、非常に問題的特徴を構成している、と思う。(「問題的」であるとは、それがともとも凌駕している、といういみではなくて、むしろ、それがひとつの有力な仕方である、にもかかわらぬ、この論文では、充分有力に構成されたいない、あるいは、仔細な検討に値する、といういみである。)

では、前置きはこれ位にとどめ、早速第1点から、みていくことにしよう。

*

この論文は、どのようなところに、理論の出発点をおいているのだろうか？

論者は、この論文で、彼の理論を、なるべく形式的に構成しよう、とこころみている。(「形式的」というのは、彼のいう「形式社会学」のいみではなくて、数学が形式的体系である、と云われる場合の、あの「形式的」といういみである。) さて、完全に形式的な体系は、周知のように、①定義されない概念(undefined concepts)、②公理(axioms)、③形式論理(formal logic)、の3つの契機の上に、なっている。といゆえ、そのような理論の出発点では、その体系のなかでは定義が与えられない概念、そして、その体系のなかではつねに成立すると考えられている(互いに無矛盾ないくつかの)公理命題が、まず掲げられることになる。この論文の論者もまた、定義されない概念をあらゆるものとして、「パターン」、「関係」、「過程」、「対応」、「行動」、「行動単位」、「集合」等といった、要素語の一群が存すべきことを、要請している。このような仕方では、まったく当然の工夫であるから、そのこと自体を問題にするわけではない。わたしが問題点として指摘したいのは、いまひとつの契機、公理についてである。

公理とは何だったか？ 公理は、これら要素語を包む命題であって、それが成立することがつねに前提としていられるようなもの（ユークリッド幾何学でいえば、平行線公理みたいなもの）であった。そのような公理として、論者は、この論文で、なにを要請しているか？ そのこそが、先に名前をあげておいた、「報酬-コスト定式化」なのである。

「報酬-コスト定式化」とは、いったいどのような内容の命題であるのか？ 論者は、簡潔に要をえた記述を与えているので、それを見よう。

「以下のIとIIを合わせ、「報酬-コスト定式化 (reward-cost postulate)」と呼ぶ。…… (中略) ……」

I: 行動単位は、その行動に対して帰結 (outcomes) を経験し、帰結は「利益」を伴う。

利得 [payoff; ある行動単位に対する]: その行動単位にとって何らかの効用を生起させる (諸) 事象

報酬 [reward; ある行動単位に対する]: その行動単位に対する利得のうち、正の値の効用を生起させる (諸) 事象

コスト [cost; ある行動単位に対する]: その行動単位に対する利得のうち、負の値の効用を生起させる (諸) 事象

・3点、注釈する。

(1) 利得・報酬・コストの「量 (quantity)」と「値 (value)」とは区別される。前者は物理的、なにより客観的測定上の値であり、従って多次元的でありうる。後者は効用の値であり、一元的である。2つの量のうち、それぞれが多次元的なら、片方が他方より大きいとは、正確にはベクトルの大小関係が成り立つことである。以下、断らぬ限り、利得・報酬・コストの量がより大きければ、値もより大

きい、逆もまた然り、とする。

…… (中略) ……」

II: 行動単位は、それが「行為者」である時、予想利得の期待値を最大化するようなプログラムを「指向活動」を経て選択し、そのプログラムの実現を目標として、そのプログラムに従って行為を遂げる。

…… (中略) ……」

特定帰結生起の主観確率は、その認知図に含まれ、後の「効用の最大期待値」原理の適用を可能にする。

効用割当て [utility value allocating; 特定の行動単位の]: その生起が予想される (諸) 事象 (予想利得) に、効用の値を、自己の効用関数に従って割当てるとその行動単位の行動

プログラム設定 [programm setting; 特定の行動単位の]: 行動のプログラム選択肢集合を設定するその行動単位の行動

意思決定 [decision making; 特定の行動単位の]: 自己の「予想利得獲得時点」・「選択原理」に従って、行動のプログラム選択肢の中から、1つの選択肢を選択するその行動単位の行動

意思決定について、2点注釈する。

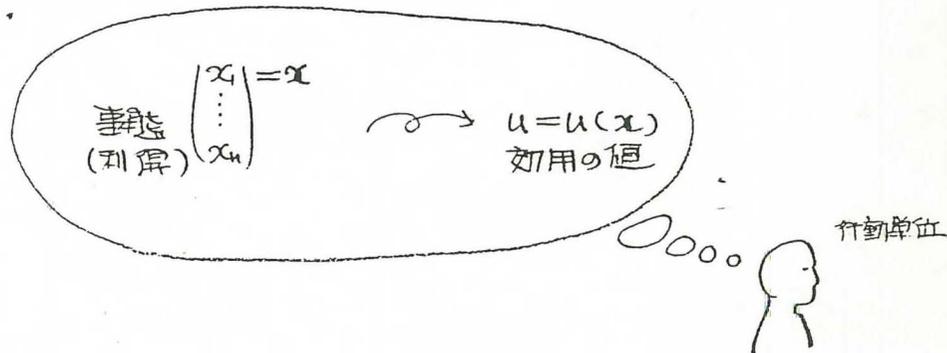
(1) (略)

(2) 上記IIのごとく、「選択原理」は、「効用の最大期待値」原理であると前提する。そうある理由は、単に期待値が効用の値と主観確率に敏感であることのみで、両者に敏感であるのは一意に「効用の最大期待値」原理であると言えない。しかし本論文では、それ以上の精度は要さぬ故、上記IIの如く仮定して論をすすめる。……」(高木 [1977:24-28]。引用文中の傍点印は、引用に際して付したものが付け加えたものである。)

NB ここらへんと付言しておくならば、論者は、報酬-コスト定式化^{レベラ}という言葉を使っているが、この用語は、誤解を招きやういかもしい。定式化^{レベラ}といへば、おそらく、経済的事実を、特定のモデルによってコード化して行くことなのかと、考へてしまう人も、少くないだろう。しかし、上のI, IIの命題は、深い、経済的事実を真実的に要約する、モデル化のために、導出したものではない。むしろ、公理として、要請されたもの、と考へるしかない。(つまりこの命題が、論文の冒頭に位置し、しかも、'postulate' とは訳語を伴っていることから、明らかである。)

第I命題から、みてこう。この命題は、利得が帰属することを示している。とはいえ、利得とは、なにか? 下の定義によれば、利得は、「効用を生起させる事象」ということであるので、(経済学等におけるような) 効用関数の存在を、論者は、行動単位に関して想定している、と考へねばならなくなる。しかし、効用関数が存在するという仮定は、実は、非常に強い仮定である!

効用関数を仮定するとは、どのようなことか? 効用関数^{レベラ}といっても、基数的(cardinal)な実数値関数と、序数的(ordinal)な関数と、2通りあって、その^{レベラ}れみ^{レベラ}が異なる。ここでは、序数的な(論者のいう「一次元的な」)場合を、考へておけば、充分である(その方が、基数的な場合よりも、条件がゆるいので、よりいっそう一般的である)。序数的な効用関数を考へるとは、行動単位に、「効用の値」とよばれる順序集合があって、その上に、行動単位



生じうるあらゆる事象がマッピングされる、と考へることと等しい。これは、大変大胆な仮定だ、と考へなければならぬ。

つぎに、第II命題として、論者は、「効用の最大期待値」原理、あるいは、予想利得の期待値を最大化することを、主張する。これも、非常に大胆な仮定だと考へられる。なぜならば——経済学にいう「最大化」とは、期待値ではなくて、効用関数の値そのものの^{レベラ}最大化^{レベラ}であつたから。(効用関数の存在が保証されれば、凸形構造(convex structure)等により、行動可能域に最大値の存在もまた保証されるゆえに。)その^{レベラ}実現^{レベラ}は、比較的容易であつた。(しかし、予想利得の期待値というものは、ゲーム理論の概念であるので、話はさう簡単でない。ゲーム理論では、解(solution)が存在するかどうか、というのが、中心的問題である。第II命題のように、それがあつてもゆに存在するかのような主張は、真くことができないはあである。とはいえ、行動単位が最大化行動をとるのだ、という仮定は、最大化行動をとることのできないさまざまな場合に関して、一切言及できない(あるいは、これらの場合の存在を、概ねく捨象してしまつてゐる)、という非難どうけても、仕方ないであらう。

報酬-コスト定式化の全体が、効用概念の上に成立つてゐるのは、いま見た通りである。そこで、効用概念の根を、さらに洗い出しておいた方が、いいだろう。

効用^{レベラ}というものは、どういう概念であるか? よく知られてゐるように、経済学における限界効用学派(Walras, Menger, Jevonsら)が登場して、古典的な労働価値論と対峙しはじめたから、よくよく反省されてゐた概念である。その初期の段階、たとえばWalrasは、実数値効用関数の存在を仮定するところから、議論をたて、Paretoは、無差別曲線(序数的効用関数)の存在を前提とあるだけでも充分である、というように、議論の基礎を強化しようとした。そしてついに、近時、SamuelsonやHouthakkerらの創始による、顕示選好(revealed preference)の議論によつて、効用関数がどのような要素的な仮定から構成されてゐると考へられるのが、見

充分にさい) ために、個人の行動の影響があらわれることはなく、
いわば、個と全体とが相互作用しているだけだ、と云える。そこで、
モデルは、非常に簡単になる。

しかし、「社会関係から出発」という、この論文では、社会
の基礎理論として、もっとも集団的な状況などが、念頭におかれ
ているらしい。どちらかというところ、これは、完全競争的な状況ではな
くて、ゲーム論的な状況である。ゲーム論は、2人、3人、……、
n人、というふうな人数を扱うが、そういう場合には、相手の出方が
判らぬので、垂くごく単純な最大化行動というものは、採れな
くなる。

報酬-コスト定式化の第Ⅱ命題において、論者は、「効用の最大
期待値」原理というものを、社会行動の基本的な原理として、要請
しているわけであるが、これには、問題とすべきところがある。ま
ず、この「効用の最大期待値」原理が考えられるためには、①(序
数的)効用関数、②効用の期待値、③最大期待値、が存在しないとい
けない。このうち、①については、第Ⅱ命題を論じた折に、その
存在に疑問を投げたのであるが、いまここでは、話の都合上、五十
歩ゆかって、それが存するものとしよう。しかし、①が存在するか
らといって、その期待値(②)が存在するとは、必ずしもいえない
のである。

(効用の)期待値とは、なにが? これは、生起した事象がもた
らした効用の値と、その事象が生起する見込まれる主観的確率との
積和である。ここから、さらに、つぎのことが判る——期待値が
といえるためには、効用の値には、(順序ばかりでなく)重が定義さ
れていなければならない。ということは、②が存在するためには、
効用関数は、(序数的であるだけでなく)基数的である必要にならな
い。ということになる。これは、かつて限界効用学派がそれほど批
判されるたゆとな、た、実数値効用関数の素朴な実在を、ここで要
請してしまっていることとなる。このことが、どのように方法論的
難点を抱えている結果になるかは、改めて言うまでもないだろう。

期待値が存在すると言ふためには、主観的確率の確率分布が一
方を存在すると言ふ、基数的効用関数がもう一方存在すると言ふな
ければならない。主観的確率という考え方について、いくつか確認
しておこう。統計学における確率の考え方には、それを、(i) 試行に
あらわれる相対頻度の極限、とみなす Neyman-Pearson 流の仕方と、
(ii) 主観的存測度、とみなす Fisher の仕方と、の少くとも2つが
ある(→小室[1974])。それゆえ、直接には経験的な対応ではない
ような、主観的確率を考へること自体は、それほど突飛なことでは
ない。しかし、ある個体が、ひとつの認知関式のよつなものとして、
二つ二つの事象が起りようである度合はどれ位、別のこういう事象
が起りようである度合はどれ位、というふうな、いろいろ要する
、ということも、説明関式のなかにとりこまれる以上は、つぎの事
を明らかにしなければならないだろう。まず、主観的確率の分布
の仕方は、どのようにして知られるのか? (主体が、おのみの
事象に付している確率(密度)を知るのだから、期待値は計算で
きない。) それがもともと観察可能でないなら、そうした概念が、
ここでも急に必要とされるようになったのか? この辺りの点に
関しては、論者自身による叙述がみあたらないので、できれば詳し
い説明をききたいものだ、と思う。

さてまた、かりに期待値が存在するという(仮設的な)主張が、
何らかの根拠づけをえたとしても、最大期待値というものがあ
るだろうか? 「最大期待値」原理というものが、想定できるのであ
らうか?

「効用の最大期待値」原理のような、一種の行動仮説をたててみ
ることは、もちろん、理論家の恣意に属する。しかし、あつこれの
仮説でなく、なぜこの仮説なのかは、(方法的な基準か、あるいは、
経験的な妥当性の基準によって)理由づけられる必要がある。

ふつうにゲーム理論では、単純に最大期待値をとると考へたりは
しない(つまり、主観的確率のような概念は、もちださず)、そ
のかわりに、ミニ-マックス原理のような決定原理を、想定する。

では、論者は、なぜ、こうした原理ではなく、「期待値最大」原理をもちてきたのだろうか？ これは、わたしには、知るべくもないが、推量するに、おそらくこういくことではなかろうか——ゲーム理論の定理が示すように、ゲーム論な状況では、各人がミニ・マックス原理にもとづいて行動するとすれば、一般にその帰結は、一義的であると言えない。矩形ゲームは確定であるけれども、 n 人の主体が、提議を断りたりして、非定和の利益をこようとする場合などには、どのようなことが生ずるのか、はっきり予想することができない。もちろん、ある範囲では予測がつくけれども、それ以上のことは言えず、ある自由度のもとに、こういうことがおこっても不思議ではないし、また、こういうことがおこっても不思議はない、としか言えないのである。これは、ゲーム理論のセッティングのもとでは、事象を記述しきるだけの精度を理論装置がもってこれない、ということも、意味する。もちろん、経験な妥当性を検証すること、思うにまかせないし、理論としては非常に問題がある。これはまあいい、というのが、論者の直観であったのではないか？ 否は、どうすればよいか、というと、ミニ・マックス原則をやめ、そのかわりに、マクシマム原則をもちてくれればよいのではないか。各人のさまざまな戦略のなす利益行列 (payoff matrix) の概念はそのままとのこしておいて、それを、基数的効用関数ならびに主観的確率のふたつの主観的概念を介して、各人の主観のなかに、写しとってしまえばよいのである。各人が実現しようとするのは、期待値が最大になるような戦略であるから、事後的に、期待しただけの効用がえられるかどうかと、じかには関係ない。このようにすれば、ゲーム論的な状況のもとで、明確な行動原則と一義的な帰結とも、考えることができるにちがいない——。

このような工夫によって、論者の意図は達成されたように見えるかもしれないが、そのために払われた犠牲も、また大きい。結局、どういうことがおこったのか？ さきの第I命題と第II命題とによって、一応、どのような状況下においても行動を決定できる主体と

いうものを、この理論は、出発点として据えることができた。しかし、そうするため、この理論は、基数的効用関数（ならびに、主観的確率）の存在という、理論経済学にくらべてはるかにぼろぼろきつい理論仮設を、背負いこんでしまつたのである。そして、この理論的要請は、理論経済学の場合とちがって、ぶりのけることが不可能である、というのは、期待値をとってしまっているからだ。経済学というきわめて特定された社会事象を扱うのにも、経済理論は、あのような一般化された議論を、方法論的に必要とした。それに比して、社会理論の場合には、経済領域よりはるかに特定でない、数量化のなすかしい、茫洋とした、全般的な社会現象を、斬りゆけていさげなければならない。そういう社会事象の領域において、論者は、より条件のきつい（つまり、簡単に言って、より合理的な）行動原則を、議論の出発点に措いてしまったのだ。このような仮定は、事実に逆行するものだ、と言えよう。

以上のべたことが、わたしの指摘しておきたい、この論文の理論上の特徴（というよりも、むしろ、難点に近いようなもの）なのである。

なぜ、論者は、この論文をこのように理論構成しようと、着想したのだろうか？ それを推測してみるに、おそらく、実験心理学が、特にこのような指向性をつよく持っていたことが、そのひとつのきっかけになつたのではないかと考えられる。まあ、実験心理学を用いられているから、（経験的にも）妥当なのではないか、というので、この図式をもちこんできたのである。しかし、わたしの見るところ、実験心理学のやり方というのは、方法論的に、きわめて問題性にみちたものである。わたしは、（ここにはあえてこのべないが）さまざまな理由から、それが、大して注目するにもあたらない試みである、と思つてゐる。

第II命題に関する指摘は、以上である。

これまでのべたように、この理論の前提である報酬—コスト図式が含んでいる主要概念、すなわち、効用が、無原則に前提されてし

まっではいけない概念であることを、指摘してみた。もし、ゆたしめこのような指摘が正しいとすれば、この論文が論じている以下の諸命題（この公理から導出されていくさまざまな命題）は、非常にうまく構成されているか（すなわち、適切な仕方、前提から論理的に導出されているか）、そのあらゆる場々にともかく、ゆたしめこれらの命題は、経験的な意味を明確にもっているというよりも、むしろ、理論的な命題であるというよりも、何か非常に妥当性の保証されたい、現実性のうすい、信頼性の乏しい命題群にすぎないのではないか、という疑問が湧いてくる。この点、論者は、どのように反論するであろうか？

あまり長くなるので、ふたつめの論点に移るとしよう。

* *

第2点は、こうであった——経験的な命題と、理論的な命題体系ないし理論体系との関わりを、論者がどう考えているのか、を122頁に、どのような問題点があるかとみとめられるのが、であった。これについて、考えをすあめてみる。

論者も、またゆたしめも、社会学の領域における普遍的な理論を志向する、というところに、非常に共通する点がある、といえよう。ただ、大きな違いは、両者の理論構築法 (theory building method) にある。論者の理論構築の特徴的な点は、経験的な命題ないし実験的な命題を、方法論上きりきりして重複する、というところにあらわれているのではないか、と思われる。実験的な命題というのは、社会心理学などが構築するような実験的な状況のなかで観察される命題という。また、経験的な命題というのは、組織分析や小集団分析などから出てくる、いわゆる交換理論の基底になるような命題を、いう。これらの命題が、この論文の中心となっているのは、一疑念のたつところであろう。

ゆたしめは、論者と異なり、実験心理学にも、また交換理論や組織

論の領域にも、なほはた随く、詳しくはとは殆どなにも知らないと言っているのであるが、ただ、方法的にいくつか言えることはあるのではないかと、思う。

さて、常識的にもしばしば言われると思うが、社会学領域（あるいは社会現象）では、実験は不可能である（という事になっている）。実験が可能であるのは、自然科学（とりわけ、物理学、基礎理論の領域）から、せいぜい心理学までである。実験とは、そもそもなになのか？ それは、自然現象のなかから、ある抽象化によって、観察すべき変数というものを抽出し、それ以外の変数から分離した上で、それらごく少数の変数のあいだの数量的な相互規定関係をとりだすための、系統的な観察を行うことである。（状況を意図的に作り出す場合を、実験、そうでない場合を、観察、と言いつけるのが、ふつうである。）これは、基本的には、Galileiのはじめた方法であるけれども、心理学でも、同じように変数を分離できるので、実験が容易であることは、小室の風に指摘するところでもある（→小室 [1974:24f]）。

ところで、経験的な（実験的な）事実と、経験的な（実験的な）命題とは、やっ違うということが、注意されなければならない。経験や実験についてただのべた命題というものは、抽象化を経なければ、必ずしも、実験的な根拠をもった科学的命題とは、結びつかない。これは、ちょうど、Aristotelesのスコラ学が、経験のある側面に、非常によく対応していたのに対し、Galileiは、経験に対応するというよりは経験を抽象化し、経験の一種理想的な状態を、法則として提示しようとした、という、オリエンテーマヨンのちがいに、よくあらわれているように思う。ところが、交換論やそのほかの、数々の実験が可能な領域での、さまざまな経験的、実験的な事実を指摘する議論というものは、どうもAristotelesの段階にとどまっているような感じがする。

理論というものは、どういうものか？ それは、経験的、あるいは実験的な事実をのべる命題を、そのまま採用するのでは、ない。（

もしそうだとしたなら、経験や実験からみちびかれる諸命題は、相互の論理的関係も明らかでないまま、あっさりそのまま、理論を構成する基本的命題として、とりいれられてしまうことになるが、それでは、知識が少しもふえたことにならない。) 理論の本質というのは、多くの妥当な命題をみだり簡単な原理を発見することであり、そのことによって知識を節約し、あるいはものごとの本質をとらえることができる。理論は、事実的な命題から直接に出發するのではない。少数の前提から出發しながら、むしろ定理として、実験的に検証され、経験的な妥当性をもつ命題をみちびくことができるように、その形をとのえるのが、理論の定石なのである。

ところで、経験的な命題群を、あるいは、実験的な命題群を、(つまり、交換論や実験心理学が発見してくるような諸命題を) 社会事象の全般にわたる基礎理論領域の命題としてとりだしてくる、という仕方——この論文もそういう試みをしているのだが——が、どういう方法的な意味をもっているのか、つぎに考えてみよう。この論文で論者がとっている、経験的、実験的命題を、理論構成に際してきりめて重視する、という立場は、つぎのような誤解にもとづくほかだと思ふ。それは、ふたつある——ひとつは、経験的な命題なり、実験的な場面にあらわれてくる現象を観察してえられる命題なりに、社会理論が説明すべき社会事象の本質というものが、かくれなく、すっかり姿をあらわしているだろう、という前提。第2には、そのようにしてとりだした命題から、それ以外の事象(あるいは、もっと複雑な、あるいは、もっと実験的でない社会事象)全般にも妥当するような一般的命題を、どんどん拡張して獲得してゆく手続きないし原理のようなものを、社会の基礎理論(ないし社会理論)は持っている、だから、出発点として、経験的、実験的命題にかかわっておれば、やがて、ちゃんとした一般理論が構成されるのだ、という前提。二つらふたつの前提的な誤解は、論文中に明記されていないが、その論旨展開全体を支えていることはたしかだ、と思われよう。

わたしの見解によれば、このうち、第1の誤解は、誤りではないか、と考えられる。そして、第2の前提にいうような手続きは、存在が保証されない、と言えよう。

まあ、第1の前提的な誤解が誤っているとは、どういうことか? たとえば、実験心理学などでは、被験者に「得点」とを与えるようにして、それを最大化するようにと指示した上で、各人がどのように行動するか、観察する。しかし、生物がある動機づけをもっていて行動するのと違って、人間が、与えられる得点を最大化するようにという動機づけは、1皿の評価関数を最大化するという、さきほど存在を保証されないか。た初用関数に関する仮定を、実験的な状況におしつけてしま、たために生じたものである。人間は、自由で、頭もよいので、実験者に説明されない、なるほどとうかと考えて、そのように行動することもできるが、だからといって、実験者の考えだした得点(ないし、初用関数)の存在が保証されるわけでもない。初用関数の存在を前提とした人間のさまざまな行動が観察された、ということのいみを一様化できるわけでもない。これは、他人の一例であるが、わたしのいいたいことは、こうだ——社会現象のなかで、実験的な状況というのば、きりめて異常な状況なのである。そこでは、(たとえどのような配慮と工夫を用いたにせよ) 基本的な社会行動をみちびくような変数の制約というものは、不可能である(成功しない)と思われよう。実験的な状況は、他の日常的、非日常的な社会諸現象にくらべて、決して特権的な位置にあるものではない。実験が明らかにするのは、観察者が、実験を行なおうという企図をもって、被験者を特定状況の中におしこめたとき、被験者(として観察者)がどう反応したか、という、日常の他人の一例にすぎないだろう。

さらに、経験的な命題についてであるが、そこには、Aristotelesの誤謬というか、観察される事実命題からどの程度の普遍性を主張できるのか、そのままでは確定できない、という問題がある。経験的事実が信頼すべきものだとしても、経験的命題は、それほど

信頼すべきものだとは言えない。しかも、社会とは、変化してゆくものである。之れゆゑ、ある範囲で集められた社会事象から、ある共通の経験を描き出すことができた、としても、之れが、普遍的なものであるのか、之れとも歴史的・文化的にいつて特殊なものであるのか、ただちに判別することはできない。たとえば、人間がみな利己的に、あるいは近代的、合理的に行動するというエートスをもっているとするが、之れはたしかに、経験的に観察可能であるかもしれない。しかし、之れが、社会の基礎理論に組みこまなければならない（あるいは、人間の本性をなす）と結論するとすれば、之れは非常に問題である。同じ主張が、200年前に妥当したか、200年のうちにも妥当するのか、まったく保証の限りではないのである。

では、どこがまちがっていたのか？ 経験的な命題は、之れを鎖のようにつなげていって理論を作るためのものである、というよりも、おそらく、理論が之れを説明するための外部基準 (external criteria) なのだ。だから、理論を描き出していくときには、経験的な命題は、参考となるにせよ、あくまでもばらばらに、理論の外側に（あるいはせいぜい、理論の外縁に貼りつけて）あるものである。特定の場面や領域を、特に説明の対象とするのならともかく、一般的な理論が、単純な経験的一般化に頼ることのできないのは、最も普遍的な相対で語るためには例外に注目しなければならないから、である。つまり、経験的な命題から一般理論を拡張するための手続きは、原理的に言って、存在しないのではないかとみられる。

経験的な事実をとりあげる命題は、無限さゆえに之れは、よいのである。特殊な経験的な事実を説明するような理論は、無数に存在するかもしれない。之れらの内、どの理論を採用するか、いちがいに言えず、向か他の手続きを用いる必要がある。したがって、外部基準は、多ければ多いほどよいのであるから、向か特定の交換的互恵性を目指し、之れを基礎理論と称するという態度は、稔り多いものだとは、言えない。むしろ、その判断によって、採棄をせよめくしてしまうことになる。

以上が、この論文を讀んで、わたしに感じた点である。論者は、芝生卒業論文に於いて、この論文を展開した議論の前提を詳論したというが、わたしは未見でもあるから、ここまでの点、わたしの2点にわたる論評が、この論文に関して議論しておくべき事柄のうちどの位をカバーすることができたのか、よくわからない。論じのこしたところに、重大な論点がお潜んでいることも、充分、考えられる。しかし、わたしは、少くともわたしのあげた2点が議論され、之れに答えられない限り、この論文が、社会学理論のネットワークを突破した、とは、言えないだろう、と思っっている。

まあ、非難めいたことばかり一方的にのべてきたわけであるが、この論文が示した論点であることは、甲斐までもないことなので、この領域に興味をおもちの方が一読なさることは、きわめて有益であることと信ずる。

廣川大三郎 1975 「顕示選好 (Revealed Preference) 理論」 (未発表)

小室直樹 1974 「社会学における統計的モデルをめぐる諸問題」

『現代社会学』1-2:24-55.

見田宗介 1972 「価値空間と行動決定」『思想』578:1-16.

Yasui, T. 1967 Revealed Preference and Utility Representation 『新理論経済学』18-2:1-9.

(本稿ははじめ、カセットテープに吹きこんだ腹案に、少々手を加えて、仕上げたものである。もとのテープで書きたい方には、お貸し申しあげる。)

CN 56

completed 1978-4-13

1st print " -4-17

2nd " " 5 1

(Hashizume Daisaburo)

